

早稲田大学環境総合研究センター(WERI)  
早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター

## 第 12 回ふくしま学(楽)会

ふくしまから伝えたいこと、  
知らなければいけないこと。

### 報告書



日 時: 2023 年 7 月 30 日 13:00-18:10  
会 場: ふたば未来学園中学校・高等学校(福島県広野町)、Zoom ミーティング  
主 催: 早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター  
早稲田大学レジリエンス研究所(WRRI)  
共 催: 福島県広野町、ふたば未来学園中学校・高等学校  
後 援: 福島イノベーション・コースト構想推進機構、双葉地方町村会  
早稲田大学アジア太平洋研究センター(WIAPS)  
早稲田大学環境総合研究センター(WERI)

2023 年 10 月 11 日

【参加者数:102 人】

## ＜プログラム＞

総合司会:井出大雅(株式会社ふたば、富岡町)

### 【開会挨拶】 13:00-13:20

遠藤 智(福島県広野町・町長)

郡司 完(福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校・校長)

中嶋聖雄(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・研究科長、早稲田大学アジア太平洋研究センター・所長)

小野田弘士(早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科・研究科長、早稲田大学環境総合研究センター・所長)

### 【パネル「私たちの創造的復興とは何か?:福島復興と日本社会」】 13:20-15:30

#### 報告 1:「岐阜の町工場の企み in 双葉」

浅野雅己(浅野燃糸株式会社(本社:岐阜県安八町)代表取締役社長、2023 年 4 月、福島県・双葉町に燃糸工場(フタバスーパーゼロミル)及びタオルショップ(エアーかおる双葉丸)・カフェなどの複合施設「双葉事業所」を開設、日本の繊維産業の底力を。双葉町を。世界へ発信する福島プロジェクトに取り組む)

#### 報告 2:「福島復興への思い」

佐藤大輔(株式会社福島しろはとファーム常務執行役員、白ハト食品工業株式会社(本社:大阪府守口市)が中核をなす白ハトグループが、2017 年から福島県楢葉町でのサツマイモ栽培を開始、2019 年には福島しろはとファームを設立)

#### 報告 3:「復興をめぐる対話の難しさ」

佐藤優香(ふたば未来学園高校 2 年、1F 地域塾・塾生)

#### 報告 4:「廃炉をめぐる対話」

鷹 琉花(ふたば未来学園高校 2 年、1F 地域塾・塾生)

#### 討論者:安東量子(NPO 法人福島ダイアログ・理事長、いわき市)

香中峰秋(一般社団法人とみおかプラス・事務局長、富岡町)

高橋洋充(福島県立福島東高等学校・教諭、1F 廃炉の先研究会、浪江町)

小松和真(広野町復興企画課長、早稲田大学リサーチセンター・副センター長、広野町)

島田 剛(明治大学情報コミュニケーション学部・教授、創造的復興研究会・経済班主査)

(休憩:15:30-15:40)

### 【グループ討論】 15:40-16:40

7 グループ・司会:早稲田大学学生

### 【総括セッション:グループ報告と総合討論】 16:50-17:50

司 会:崎田裕子(NPO 法人・持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長、1F 廃炉の先研究会・副代表、1F 地域塾・副塾頭)

#### 討論者:

浅野雅己(浅野燃糸株式会社・代表取締役社長)

佐藤大輔(株式会社福島しろはとファーム常務執行役員)

佐藤優香(ふたば未来学園高校 2 年、1F 地域塾・塾生)

磨 琉花(ふたば未来学園高校 2 年、1F 地域塾・塾生)

**【閉会挨拶】 17:50-18:10**

松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・センター長、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授）

## パネル「私たちの創造的復興とは何か?:福島復興と日本社会」

### 【報告】

(報告内容については、報告資料をご参照ください)

#### 報告 1:「岐阜の町工場の企み in 双葉」

浅野雅己(浅野燃糸株式会社・代表取締役社長)



#### 報告 2:「福島復興への思い」

佐藤大輔(株式会社福島しろはとファーム常務執行役員)



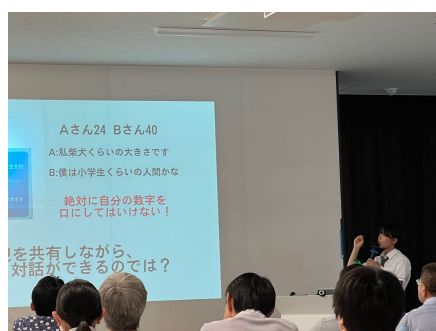
#### 報告 3:「復興をめぐる対話の難しさ」

佐藤優香(ふたば未来学園高校 2 年、1F 地域塾・塾生)



#### 報告 4:「廃炉をめぐる対話」

磨 琉花(ふたば未来学園高校 2 年、1F 地域塾・塾生)



## 【討論】

討論者：安東量子(NPO 法人福島ダイアログ・理事長、いわき市)

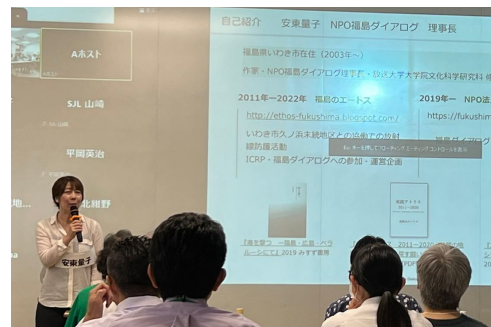
香中峰秋(一般社団法人とみおかプラス・事務局長、富岡町)

高橋洋充(福島県立福島東高等学校・教諭、1F 廃炉の先研究会、浪江町)

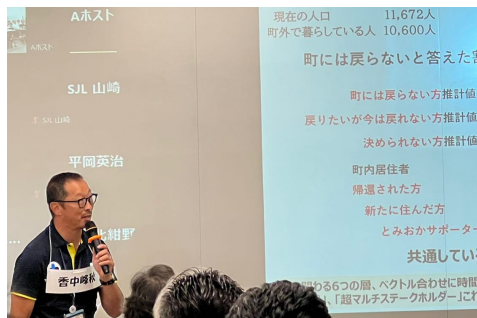
小松和真(広野町復興企画課長、早稲田大学リサーチセンター・副センター長、広野町)

島田 剛(明治大学情報コミュニケーション学部・教授、創造的復興研究会・経済班主査)

安東：震災直後は、様々な団体において女性が私のようにトップを務めて活躍していたが、時間が経つにつれて徐々に減ってきている。グラフを見ても、福島県の20代、30代、40代、50代と全体的に女性の数が減ってきていて、女性の発言力がだんだん弱まってきているように思う。そういう意味では、女性の消えていく復興だった。一般に男性の方が、自分の知らないところで勝手に決めていることが多い。ということで、現在の復興を総括すると、地域社会の男女のパワーバランスは明らかに崩れており、女性の発言力は非常に低い状態で、それに配慮しないと、女性の声はますます反映されない。

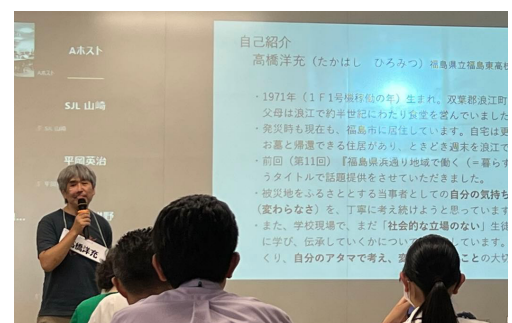


香中：震災前の富岡町には約16,000人の住民がいたが、現在は約11,670人となり、そのうち実際に住んでいる住民はおよそ2,200人で、新たに住み着いた方々は1,200人ほど。新たに住んでいる方が圧倒的に多いというような人口構成に基づき、富岡町は第三次復興計画を策定しようとしている。創造的復興を考えると、それは超マルチステークホルダーのアプローチであると言える。



町内に住んでいない住民や富岡を支援したいと考える外部の方々も積極的に参加し、まちづくりに取り組んでいる。富岡町外から来てくれる富岡サポータークラブのメンバーも約500人以上おり、ボランティア活動や町への訪問などさまざまな形で町をサポートしている。このような超マルチステークホルダーの協力を得ながら次の政策を策定していくプロセスは、このエリアに独特な形かもしれないが、創造的復興の一つのアプローチとなると思う。

高橋：このような世代を超えた場では、参加者たちは「この人はきっとこういうふうを考えているのだろう」と思ってしまい、社会的な立場から役所の関係や企業の背景の関係もある中で、それ以上のことは言えなくなってしまう。彼らの表情には、その痛みがはっきりと表れている。しかし教師として高校生に対していると、彼らはまだ社会的立場がないので、自分の思っていることを自由に言っても誰からかクビになるわけではないので、学生たちが問題について考え、対話する場を作れないかと考えた。もちろん彼らの関わる対話の場を作るためには、基礎的な知識が不可欠であり、学びの場としての役割も重要だと思う。



小松：創造的復興の行政的側面とは、地域課題に取り組むことだと考えている。すでにおっしゃったように、取り組むべき問題はたくさんある。二つの点についてコメントしたい。

一つは、原子力発電所事故による地域産業の衰退である。この地域は、長らく原子力発電所や火力発電所などの電力産業に依存してきた。しかし、原子力発電所の廃炉などが行われ、地域経済に大きな影響を与える中、この状況を転換し、再び地域経済を活性化させるために、福島イノベーションコースト

構想が期待されている。一方、地元の取り組みとして、新たな雇用機会を創出するために企業誘致を推進し、工業団地や産業団地の整備など、地域のインフラ整備に取り組んでおり、これによって地域の活性化と雇用の創出を促進し、地域社会を改善していきたいと考えている。



2点目としては、人口減少と少子高齢化は日本全国で共通の課題であるが、そうした状況下、広野町が取り組んでいる移住定住の促進政策としては、移住定住をしていく上での地域イメージの向上が一番大事だと思う。広野町の魅力をより幅広い世代の方、エリアに発信し、例えばふたば未来学園に象徴される震災復興による未来をつくるまちとして今PRを進めている。住環境の整備のところで、住宅団地の造成にも取り組んでいる。「HIRONO TO TOWN」というのは、「広野町と」一緒に家族が成長する、ずっと「広野町と」歩んでいく、そういった未来へ繋がる期待を

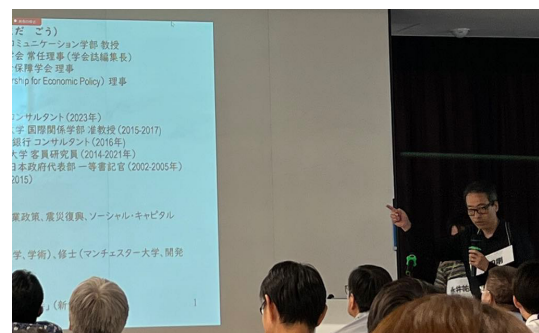
込めた愛称である。民間の資金、経営能力、技術力を活用することで、住宅地の魅力を高め、住み心地の良い場所にするための施策も検討している。今の住民が新しい仕事に移る際、他の地域に行くのではなく、この地域で新しい仕事が見つかり、家族もここで働けることを伝えることで、定住を促す取り組みにつなげたい。

地道に取り組むを続け、成果を上げることで、住民や町民からの信頼を築いていく努力をしている。創造的な復興は難しい課題であると認識しているが、役所として結果を出し、町民の期待に応えたいと考えている。

**島田:**歴史的な意味で、元々福島第一原発が建設された際に工業団地を作る計画があり、結局工業団地はできなかった。この地域で産業を作ることは非常に困難な面がある。現在、企業がやっていることは、震災後だけでなく、もともと難しい場所に今チャレンジしていることが一つのポイントだ。右側の表は浜通り全体の第二次産業の従業員数の伸びを示しているが、これは原発立地地域内外を問わず、変化がない、産業を作ることは難しかった。

他の地域から来た開拓民がいたので1950年のところで人口が増えたが、農業の条件が良くなかった離農だけでなく、海外移民として出て行った方も多く、1955年ぐらいから人口が減っていった。かつて多くの移住者を呼び込んできたが、結局は離れてしまった。今2回目の挑戦で移民を定着させる方法を新たに見つけることは非常に重要だと思う。

力関係とガバナンスの観点から見ると、多くの場合、日本では上からのガバナンスが主要な議論となっており、政府や権力者が統治を主導する傾向がある。一方で、下からのガバナンス民主主義の視点では、議会や法律規制によって国家を監視し、参加する役割があるが、福島第一原発のような事例では、下からのガバナンスが難しいと言える。さらに難しい点は、東京電力などの民間企業が関与していることだ。コーポレートガバナンスの概念に基づく、一般的な企業は株主に責任を負い、従業員や地域共同体、環境に対して努力をするものだが、ペナルティがないことが通常の状態である。今後、下からのガバナンスや民主主義が、法律や議会の支援を受けて国家を適切にコントロールする方法としてどのように機能するかが、重要な課題となるだろう。



## 総括セッション: グループ報告と総合討論

**司 会:** 崎田裕子 (NPO 法人・持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長、1F 廃炉の先研究会・副代表、1F 地域塾・副塾頭)

討論者：浅野雅己(浅野燃糸株式会社・代表取締役社長)

佐藤大輔(株式会社福島しろはとファーム常務執行役員)

佐藤優香(ふたば未来学園高校 2 年、1F 地域塾・塾生)

磨 琉花(ふたば未来学園高校 2 年、1F 地域塾・塾生)

## 【グループ報告】

### A グループ

A グループでは、創造的復興を考える上で四つの要素が話に上がった。一つ目が、教育と当事者の意識作り、二つ目が自分自身の復興。三つ目が、被災者の復興のあり方、四つ目は企業が参入していくためのあり方である。

教育と当事者意識作りについては、東日本大震災は福島だけでなく、日本全体の問題であるため、経験のない人々も当事者意識を持つ必要がある。日常生活の中では災害の現実を忘れる傾向があるため、当事者意識の醸成とそれに関連する教育が重要である。この教育は、被災を経験していない人々に向けても行われるべきであり、過去の悲劇を繰り返さないようにすることが目的である。知識のない人々には問題意識を持ってもらい、災害を経験した人々には心のケアと配慮を提供する必要があるとの意見が出された。

東日本大震災の話題を取り上げる際、多くの人々は心の傷からくる抵抗感を抱いており、まず自分たちが感情を整理し、自分自身がまず復興していくことが大切だとの意見が出された。

三つ目について、今の創造的復興の議論は生きている人間の目線での復興の話になっていないという話が出た。現実には生きている人のための創造的復興を再度考えて、単に語り継ぐだけではなく、新たなアクションや取り組みが必要であるという意見が出された。

企業が、復興に参入していくためには、震災があったからこそ存在する福島を理解している企業とのタイアップが重要だという話があった。福島はとても悲しい場所で、命が失われた町でもある。私たちは日々の食事を通して命をいただく立場にあるが、そうした場所とのつながりを作り、共感性の高い企業が参画することで今後さらに業界が発展していくのではないかと意見が出された。

### B グループ

創造的な復興について、まず、「創造的」をどう定義するか、みんなの意見を聞いてみたところ、「前向きな姿勢」「クリエイティブ」「今までにないものを感じる」という定義が出た。その中で、一番大事なのが「対話」という言葉である。対話のプロセスは非常に大事で、特に若い世代ではこのプロセスがよく知られていないことが問題だという意見が多く出た。その中で、地元を愛するという意見も出た。今は別の場所で暮らしているが、地元愛が強い方は多い。例えば、神奈川出身なら神奈川出身ではなく横浜出身と言えればいいし、横浜出身と言うだけで神奈川の横浜出身だと分かるような地元の愛にあふれたような形で追っていければ良いと思う。

### C グループ

私たちCチームは、創造的復興とは何かを議論するにあたり、「私たちとは誰か」「創造性とは何か」「復興とは何か」という観点から話が進んだ。

「私たちとは誰か」について、例えば、震災前にその地域に住んでいた人、震災後にその地域に移り住んだ人など、その地域に直接関係する人たちがいる。その枠から抜け出して、もっと自由に考えた方がいいというのが結論だと思う。私達に加えられる要因として県外に住む主体もあるので、情報入手の難しさが大きな障害になっていると思う。また、「復興」という言葉だけ聞くと過去に戻るという意味合いが強いのではないかと、必ずしも前と同じ形に縛られるのではなく、新しく受け入れられる側面に焦点を当てるという意味での創造性を主張できないか、という議論もあった。

## D グループ

私たちが議論したのは、創造的な復興に関する問題だ。まず、住民との齟齬があることについて話し合った。この問題の原因として、考え方が固定化している可能性や、異なる価値観が存在することが挙げられた。住民との齟齬を解消するため、男性だけでなく女性や若い世代も参加させることが提案された。このために、話し合いのタイミングは学生なら時間帯を選ぶ必要があり、参加人数や男女の比率を検討することが重要だと思う。また、「私達」という今回のテーマは、住民だけでなく移住者や震災前の住民、将来的には海外からの人々も含めて、共通の価値観を築くための対話の場を設けるべきだという結論でまとまった。

## E グループ

復興を考える際、誰の復興なのかから始まって、「私たち」という言葉がよく使われるが、「私たちは具体的に誰を指すのかについて話した。この議論から、原発という福島の問題は日本全体で考えるべき問題だが、福島に集約されているという話から、自分たちが日本の未来をどうしていきたいのかという方向にも繋がるという意見が出た。復興の概念は未来志向である一方、今までのことを振り返るという話もある。現在の地域や地元をより良くし、復興を進めたいという願いを持つ人々も存在し、異なる思考が存在すると感じた。人それぞれが色んな意見や価値観を持っているので、他人の考え方を否定するのではなく、価値観が違うことを理解しながら、「この人はこういう考え方をしているけど、私もこういう考え方をしている」と話し合える環境を作ることが大切だ。

## F グループ

冒頭の方で、安東さんが女性の存在感が消えていく復興について話をしたが、大熊町では熊女と言われる 20 代から 30 代の女性の方が復興の支援を行っていて、女性の笑顔があると、街全体も明るくなるので、女性の力は無視できないという話をした。

雇用の観点から言えば、1F の給食センターや役場などで女性が活躍している場面が多い一方で、子育てや出産などのライフイベントに関連して、移住や戻りの際に将来の不安も考えていかねばならない。子育て支援住宅の拡充や、妊娠中や出産後も働き続ける女性の経験談を通じて、科学的な安全性だけでなく、実際の経験から得られる安心感の提供が必要とされている。

雇用に関して、双葉町は大熊町よりも先行しているものの、企業誘致においては除染関連の短期的な雇用が多く、長期的な雇用創出が課題とされる。今後は長期的な雇用を提供する企業誘致策を検討する必要があり、女性のキャリアプランにおいても、広い選択肢を提供し、移住の材料として活用できるような環境整備が必要である。

## G グループ

まず、福島の復興を共に考えるために必要な対話の参加者について、移住者と元の住民、それぞれが地域で実現したいことを持っていると考えられるため、両者が一緒に考える場が必要である。また、双葉郡内の町々は復興の度合いが異なるため、これらの町の間で連携を強化する方法についても議論の余地がある。

トップダウンと下からのボトムアップの民主主義について、この部分では、環境省の元職員が、中間貯蔵施設の進行において地権者とのコミュニケーションが不足していたことを認識し、地域の理解を得るために努力していると述べた。また、除去土壌の再生利用に関する方針についても、一部の地域住民が理解していないことがあるという点も言及された。保安院で勤務していた方は、日本の民主主義について考え、国会議員への説明を通じて政策決定が行われてきたが、それだけでは不十分であると述べた。

福島ダイアログの活動に参加し、対話を通じて参加者の理解を深めることを実践しており、その過程で政策決定と対話を結びつける方法については深く悩んでいるとの話である。

東京電力の方は、廃炉に関連して、規制委員会のルールや地元との協定の枠組み内で説明を行ってきたが、地元の住民からは説明がないと言われたことにショックを受けたと述べた。地元自治体に説明したが、住民まで話が行き渡りにくい可能性がある。対話を行いながら最終的な政策決定にどう結びつけ

るかという点について、解決策は出ていないものの、実務経験から生じる悩みや疑問があることを知ったことは非常に良かったと思う。

## 【総合討論】

**浅野:**昔は「元の状態に戻す」という意味の復旧を使ったが、双葉町では、復旧はできなくて元には戻せないで、新しい町を作っていくしかない。

今日対話が大事だという意見が出た。私も官僚の方々などと復興について対話をすることがあるが、昨日はダボス会議の青年メンバー三、四十人が来て話をした。そのうち4人は双葉もしくはこの辺りに移住しようと思っているとのことで、「すごいところになる」と言われた。13年たってもこういうセッションがあるということが、双葉に拠点を置いている企業として関わっている私としても嬉しい。

**佐藤(しろはとファーム):**まず一点目はご縁で全部繋がってこの場所に至ること。例えば私たちの会社に入社した若いメンバーも、もし入社しなければ檜葉町で事業を始めることはなかったでしょう。今日の方々の話を聞いて、地元にいるからこそ自分たちの町をどうしたいという思いを強く持っている方々と出会えることが、積み重ねられて今に至っているのだと感じた。地元にいるからこそ未来を築ける楽しさに目を向け、今までの歴史や出来事を受け止め、学び、伝えていく意識を持ちつつ、この地域をどうしていくか、どんな縁で未来を創りたいかを考えることができる場所であり、今日の出会いや対話が重要であることを感じた。

もう一点は、決めるということ。要はゴールを設定し、そのための努力をすることは段階的に進むことができるが、ゴールが定まっていなかった場合、進捗が分からなくなる。私たちの企業では、業績や方向性を決定するプロセスがあるが、地域の未来をどう築いていくかを決定するプロセスは、議論や集まり、家族や地域行政との対話など、さまざまな要素が関与する。皆さんがその決定に向かって毎日少しずつ前進すれば、ゴールに近づいていることを感じることができ、1日の馬力が出てくるでしょうと思う。

**佐藤(未来学園):**震災が発生したときは年齢が小さくて、当時の状況を理解できなかったが、この場で震災のことを覚える人が多くて、彼らと対話し、知らないからこそ、いろんなことを聞けるし、いろんなことを聞けるからこそ、小さなことを知っている人は「そういう意見もある」と思えるのだと言われた。分からないことがあっても、疑問があれば何でも聞いていいだということを、この場を通して学んだ。

**磨:**今の中学1年生が2011年生まれたので、学校で震災の話をしたときに、それを聞いて驚いた。いろんな知らない人たちの狭間の中で、私達は教育を受ける。こういったイベントに参加できること、それを知らない子どもたちに伝えていけることはとても素晴らしいことだと感じた。

また、Bグループで地元はいいという話が出た。そういった意見を持つ人々が多くて、このような人々が積極的に意見を交換し、対話の場が提供されれば、対話が広がっていく可能性があると思う。

**南郷:**磨さんがプレゼンテーションの中で、共通点を見つけることから始め、一緒に階段を上っていくことが、対話を成立させるための鍵だと提言された。これは創造的な復興において非常に重要なヒントだと感じた。富岡町の人口動態の話があり、居住者のうち町内に住んでいる方は20%で、大熊町では5%しか町内に住んでいない。さらに、その5%の中にも移住者がいるため、元々の町民と移住者の関係性が複雑であるという話もあった。異なる立場やバックグラウンドを持つ人々が集まり、新たな産業や働く場を創り出すために対話が必要であり、地域住民と移住者、新たに進出してくる事業との対話はまだ難しい部分もあるが、その鍵はセットアップにあるということを知りたい。

**菅波:**グループ発表の中で、福地さんから「さまざまな経験を持つ方々の話を聞くのはとてもいいことだ」という発言があって、報道の様々な経験に基づくものなのだろうかと思いつつ、発言の価値をもっと意識すれば、若い人の意見も、知識や体験のない人の意見も、対話の場で混ざり合わせられるのではないかと思った。

ふくしま学会には1回目から参加しており、福島から伝えたいことや知らなければならないことについて、知ること押し付ける的な表現ではなく、知らないからこそ見ることがあるということも大切だと思う。対話の魅力は、情報の受け渡しだけでなく、異なる視点や経験を交換し合うことであり、小さな対話の積み重ねが重要であると思う。

**ふたば社員:**一人ひとりが自分たちの地域のことを考える、このエネルギーがあることにとても価値を感じている。この土地の印象を変えたいと強く思う。まちづくりに携わっている者として、よそ者のみで何も知らないという状況を変えることに少しでも役に立てればと思っている。

**野村:**毎朝ラジオでニュースを伝える仕事をしている。今日は長い時間、たくさん話を聞くことができた。次に福島の復興をニュースでお伝えするときには、今お話を聞かせてくださった方々の顔、そして、これからお話をされると思われる方々の顔が、少しでも反映されていればと思う。

**A グループ:**浅野さんから聞いた「13年間続いているこういう集まりが続いているのは珍しいだ」というお話。人々が集まって、さまざまな経験を共有し、前向きに励まし合う場が貴重であることを感じ、家族を大事にしている思いが対話を通じて共有され、これからも続けていくべきだと思う。

**B グループ:**私は東北や福島に縁もゆかりもなく、震災のときも小学4年生であり記憶がない状態で、今日の場に参加した。当事者ではなく、将来的な関与も不確かな中で、どのように参加すべきか考えながら今日の話を聞いた。皆さんが言ったように、対話は非常に重要だと感じた。情報をニュースや記事から得るのではなく、実際に対話することで、震災や福島に対する距離感を感じたが、自分なりにできることがあるのか、関わっていききたいという思いが強く生まれた。

**C グループ:**本日の機会を通じて、対話の重要性と難しさを改めて感じた。参加する前は、知識の差があるので、対話が難しいかもしれないと思って、自分も福島とあまり関わりのない人生を送ってきたため、知らないことに対する恥ずかしさを感じた。しかし、実際には知識の差があっても、知らない人の意見を活用し、新しい価値観や意見を抽出することが非常に重要だ。したがって、多様なバックグラウンドを持つ人々が集まる機会は非常に重要であり、今後も継続すべきだと思う。

**D グループ:**福島県や東北を訪れるのは今日が初めてで、震災当時に東北で経験されたことはあまり覚えていないが、東北生まれでもなく、震災のことをよく知らない私のような者でも、創造的な復興に貢献できるのだと気づきがあったので、これからも考え続けていきたいと思う。

**E グループ:**震災当時、私は中学生だったので、震災の状況はほとんど知らないが、ここに来て、ここに住んでいる人たちだけでなく、東京とかに住んでいる人たちも、福島の復興に尽力していることを知った。専門家の方や地元の人たち、地元の高校生たちからさまざまな意見を聞いて、異なるアイデンティティが異なる考えを私たちに与えてくれ、それが福島の良い未来を築く一助となると思う。

**F グループ:**今日は色んなバックグラウンドを持った人を集まり、対話をしていくことが重要だと感じた。震災当時、私は別の地域に住んでいたため、福島の事故についての知識が不足して、私自身も今回の参加が適切なのか不安だった。しかし、知識を教えるだけでなく、生の声を聞く場に参加することの重要性を感じ、自分がどのように関わっていけるか考える中で、こういう場で現地の方と非現地の方の話を伝えていくことで知識が広がると感じた。今後、私はこの形で福島のことを伝えていければと思う。

**森口:**今日のテーマ、特に「私たちの」というキーワードはとても大事だと改めて感じた。浅野社長から「13年経ってこういう議論ができてるのはすごいことだ」と言われたが、逆に言えば、13年経ったからこそできる議論もあると思う。

よそ者がどこまで入っていいのかという議論もあるが、私自身もよそ者であり、外からの人が入ることでも出来ることもあると思う。今日は安藤さんからも高橋先生からもF-REIに対して非常に厳しいコメントがあり、実は私も同じように感じた。同じ外から来た人でも浅野燃糸さんに対しては共感できるのに、何が違うと感じるのかを考えてみたいと思う。

若い人たち、特にふたば未来学園の学生たちは長い間関わっており、今日も早稲田大学から初めて参加する学生たちを含め、多くの意見を提供してくれた。このような多様な視点を大切に、今後も継続していきたいと感じた。

香中さんが示した大事なデータが示すように、富岡町にはさまざまな立場の人々がいる。私は2013年から外部専門家として原子力規制委員会の機関に向けた安全安心対策検討チームに参加しているが、その当時は元住んでいた人が町に戻りたいという意識が非常に強かった。しかし、時間の経過とともに状況が変わった。今でも町に戻りたいと思っている方々がいる中で、現在の状況を伝えることができていないのが課題だ。私たちが行っている前向きな議論を伝えることで、彼らの考えが変わる可能性もあるかもしれない。

## 【閉会挨拶】

松岡 俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・センター長、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授）

第12回ふくしま学（楽）会の閉会にあたり、私ども早稲田大学ふくしま浜通りリサーチセンターが大切にしてきた点や今後のことなどについて、Closing Address としてお話ししたいと思います。

本日は「私たちの創造的復興とは何か？：福島復興と日本社会」をテーマに、浅野撚糸の浅野社長、福島しろはとファームの佐藤常務、ふたば未来学園の佐藤さんと鷹さんに、それぞれの角度から大変興味深いご報告をいただき、誠にありがとうございました。また、福島における創造的復興とは何か、日本社会と福島復興との関係をどのように考えるのかをめぐって、安東さん、香中さん、高橋さん、小松さん、島田さんに討論者として登壇いただき、多様な論点を提出いただき、ありがとうございました。さらに、総合司会の井出さん、総括セッションの司会の崎田さんも大変お疲れ様でした。ありがとうございました。

今日の5時間にわたる議論を通じ、原発事故から12年と5ヶ月という時の経過を踏まえ、私自身、改めていま、原子力災害からの創造的復興とは何か？、安全で安心して暮らしやすい魅力的な地域とは何か？、30年後、50年後、100年後を考えた持続可能な地域社会の形成はどうしたら良いのか？などについて、根源的かつ具体的に考え、多様な未来の選択肢を研究開発し、広く社会へ提案することが必要だと強く感じています。

今、世界の地域づくりやまちづくりをみると、「人間中心のまちづくり」（ソフトシティ）、「歩きたくなる、居心地の良いまちづくり」（ウォークアブルシティ）、「自動車に依存しないまちづくり」（カーフリーシティ）、「公民連携のまちづくり」、「対話型のまちづくり」など、新しい地域づくりの多様な創造的なアイデアやモデルや手法が提案され、実践されています。

先月の6月9日、前から行きたいと思っていた岩手県紫波町のオガールプロジェクトを、初めて視察しました。5年間で100回を超える住民対話というとても丁寧なまちづくりプロセスを実施し、地域社会の人々のプロジェクトに対するオーナーシップを醸成し、よそ者である東京などの専門家を上手に使い、何よりも町役場や地域社会の人々が多様な勉強会や研究会を岩手県立大学や東洋大学などと共に行い、文字通り Learning Community を創造している姿にとっても強い感銘を受けました。

福島原子力災害からの創造的復興とは具体的にどのようなものなのか、この12年余り、福島復興と廃炉を研究してきてようやく分かってきたことがあります。全町避難地域、特に7年、10年を超えて全町避難した地域では元に戻す復興は難しく、新たな状況に適応した柔軟な地域再生が必要です。そのためには、世界や日本の様々な先進的な事例に学ぶ必要があります。しかし、当然ながら、レベル7の原子力災害からの地域再生モデルは世界のどこにもありません。

スリーマイル・アイランド原発事故はレベル5の事故で、最大14万人が避難しましたが、せいぜい1

週間程度の避難でした。福島と同じレベル7のチェルノブイリ原発事故では、除染は行わず、周辺の汚染地域は放棄され、多くの町や村が放棄され、周辺住民は移住しました。世界にモデルがないのなら、日本社会に、原子力災害の被災地における30年後、50年後、100年後を考えた地域再生の哲学や知恵があるのか。現時点では無いのです。だとすれば、そうした知恵を創り出す仕組みを、どんなに困難であろうと私たちは創っていく必要があります。

かつてドイツの哲学者ヘーゲルは、「ミネルヴァの梟は黄昏に飛び立つ」と言いました。知恵の象徴である梟は、時間が経過しないと、気が熟さないと、飛び立たないのです。新たな課題を解決する知恵は、最初からあるわけではなく、経験的事実の積み重ねの上に創造されます。こうした意味では、大震災と原発事故から12年余りが経過した福島の復興と廃炉にとって、今が梟が飛び立つ時期であり、今、飛び立たなければ、福島で梟が飛び立つことは永遠にないのかもしれないかもしれません。

「地域のなかの廃炉」、「社会のなかの廃炉」を進めていくために、4年前に1F廃炉の先研究会をつくり、1F廃炉の先研究会の活動をベースとして、昨年7月に、早稲田大学とふたば未来学園との協働事業として1F地域塾を創設しました。1F地域塾では、地域社会、国・東電、専門家がそろい、1F廃炉の将来像を考える「対話の場」＝「学びの場」をこれまで6回行い、9月9日には第7回1F地域塾を開催します。

創造的復興に関しては、2年前に創造的復興研究会を立ち上げ、経済班、社会班、文化班による調査研究を続けています。1F廃炉の先研究会をベースとした1F地域塾のように、今後は、創造的復興研究会をベースとした福島再生塾という「対話の場」＝「学びの場（Learning Community）」づくりに挑戦したいと考えています。

このふくしま学（楽）会は、通常の学会の間にカッコ書きで、「楽しい」という言葉を入れています。これは産業廃棄物の不法投棄問題から地域再生を行なってきた瀬戸内海の豊島における豊島学（楽）会を参照したのですが、私自身は学ぶことが楽しい「対話の場」＝「学びの場」を創りたいとの思いで、6年前、ふくしま学（楽）会を始めました。

人は本来、知的好奇心を持ち、知りたい、学びたいという根源的な欲求があります。わたしたちホモサピエンスは、ラテン語で「賢い知恵のある人」という意味であり、人類の歴史は学びと知識生産の30万年と言えます。先日、私の講義に出席していた現役の高校の先生から、高校の指導要領では「主体的・対話的な深い学び」ということが書かれていて、現場の高校の先生には「耳にタコ」の言葉になっていると聞きました。「へー、そんなにものすごく大事なことが指導要領に書かれているのか」と感心しながらも、高校でも大学でも、なかなか「主体的で対話的な深い学び」が出来ていないなど、深く反省し、是非、そうした「学びの場（Learning Community）」を大学で、様々な学校や組織で、地域社会で、福島で創っていききたいと、改めて強く思っています。

原子力災害からの創造的復興という人類史上初めての社会課題に挑戦する福島は、福島内外の多様な人々による「学びの場（Learning Community）」の形成により、創造的復興の福島モデルを研究開発し、日本や世界に提示するという高い志を掲げた福島復興の原点を再確認することが必要です。是非、皆さんとチャレンジしていきたいと思います。

本日の第12回ふくしま学（楽）会には、会場参加60名、オンライン参加42名の合計102名の多くの皆さんに参加いただき、5時間を超える熱心な議論をいただき、誠にありがとうございました。

以上